

『人』の教育

三 枝 樹 正 道

いかに制度が整ふても、これを運用する人に充分の教養が無かつたならば、その制度は何にもならぬ。又いかに他の條件が完備しても、人が無かつたならば、それは廢物も同然である。實に人こそ肝要なものである。處が案外、この人に關しては無頓着で、他の設備、制度等物質的な條件が重要なものに考へられる。誤れるも甚しき考へである。

扱て人の教養は一朝一夕で出来るものでなく、實は頑固な幼児の間に既に種々の教育的な影響を受けるものである。何も知らない子だと思つてゐる間に、子供は両親の良かれ悪かれ種々の感化をうけるものである。而も、これが實はその子の一生を左右する位、大きな力になるのである。この意味に於て、幼少兒の教育は極めて大切なものである。幼少兒の教育は元より智育ではない。訓育即ち躰である。この躰に二通りある。道徳的な躰と宗教的な躰である。これらは何れも家庭で行ふべきものであつて、タトヒ學校へ入學しても、學校では容易に實踐出来るものではない。

日曜敎園は、この家庭教育、學校教育の補助の意味で設けられたものであるとしても、その目的とする所、本質的な任務は幼少兒の宗教的な薰陶であり。實は、その子供の全人格的教養の基礎をなすべきものであつて、決して輕々に考へたり、況して行つてはならない重要な施設である。この敎園に於ける薰陶が、眞面目に施されることによつて、その子供の全生涯に渡る訓育は始めて完ふせらる。かゝる意味にて敎園は教育上非常に重大なる地位に立つものであるから、慎重審議研究と實踐とに於て、不斷の努力によつて擴充發展せられねばならぬ。